

てい
談

モスクワからの

シグナル 〈上〉



ソ連の最高指導者・ゴルバチョフ書記長

出席者

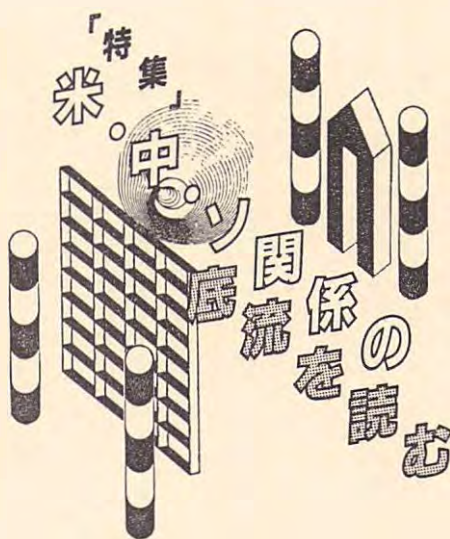
（東京外国語大学教授）
中 嶋 嶺 雄

（中部大学教授）
八 木 澤 三 夫

（公明党副書記長・衆議院議員）
市 川 雄 一

（司 会）





米ソ、中ソ関係を中心に国際政治が動きだした、との見方が強い。これは新たな緊張緩和への確実な流れかどうか。日本への影響はどうか。ここでは国際政治の底流を読むための材料を二回にわたり提供する。

まず、ソ連のゴルバチョフ書記長のウラジオストクでの演説の意味を中心に米・中・ソ関係に深い関心をもつ二人の専門家に、市川副書記長が聞いた。

(編集部)

市川雄一氏 世界の平和がどうなるか、という事では何と
いっても米ソ関係に強い関心を持っているわけですが、また
同時に、中ソ関係も米中関係も、ひいては日中、日ソも米ソ
の関係に大きく響いてくると思います。現時点での米ソはデ
タントなのか——このデタントというのは見方、あるいは概
念の規定の仕方、定義によって非常に幅広い概念としてとら
えられますから、見方によって変わってくると思うんですけ
れども、今、米ソ関係を一体、基本的にどう見るべきなのか
ということが基本の問題意識にありまして、そういう中で、
まず、七月二十八日のウラジオストクにおけるソ連のゴルバ
チョフ演説がどういう意味を持っていたのか、を改めて整理
してみたいと思います。

従来、レーガン大統領がソ連に向けて何か宣伝をする、演
説をする。あるいはゴルバチョフ書記長がアメリカに向けて
何か新しい提言をする。どうも米ソ首脳会談に向けてのお互

いのアドバルーンを上げ合って、キャッチボールしている。そういうキャッチボールをしながらだんだん焦点が煮詰まっていくな。今回のゴルバチョフ演説も、そういう従来の相互の政治宣伝の一環のものなのか。それとも今回のゴルバチョフ演説は、今までにない何らかの意味を持っているのか。もしもっているとしたら、どんな点で今までと違うのか。その辺をまず中嶋先生からお願ひしたいと思います。

中嶋嶺雄氏 市川さんが今おっしゃったように、いわば米ソ関係は依然として緊張緩和のプロセスにあると見ていいのかという点について、その枠組みの中でゴルバチョフのウラジオストク演説があつたのかという見方と、もう一つ、別の文脈として見る見方があるという問題提起ですけれども、私は、非常にはっきりと別の文脈だと見るわけです。もちろんゴルバチョフ演説が米ソ関係に関係しないということではないのですが、従来の米ソの宣伝合戦の文脈での発言と今回のゴルバチョフ演説とは、根本的に質が違ふということに意味があるんですね。

ここにゴルバチョフ演説の原文があるんですが、実は日本の新聞は、外交部分のところだけ取り上げていましたけれども、実はゴルバチョフの演説は前半と後半に分かれていました。前半はソ連の内政問題、とくに経済開発の問題なんです。ソ連の経済問題を非常に具体的にとりあげています。しかもウラジオストクというソ連にとって二十一世紀の経済開

発なり、シベリア開発、アジア太平洋時代を迎えなければいけないソ連の新しい処女地開拓の地ともいうべきところで演説をしたという点が意味深いですね。しかも、このニュアンスの中には、将来はウラジオストクを開放するというニュアンスも受け取れるんですけれども、そういう状況の中で今のソ連を見詰めてみると、新しい太平洋時代に対応できるような経済のシステムにとってもなっていないんじゃないか。エネルギー資源の活用その他も非常に問題が多い。そこを強調しているんですね。

とくに七項目にわたってシベリア開発の問題点を強調して、まして、まさに資源の配分その他についてもニューアプローチが必要なんだということを強調しています。そして、総合的なエネルギー資源の利用、エネルギーと燃料の一つの一貫システムの形成、こういうことにおいて、いかにソ連が立ちおくれにいるかということなんです。

そういう前提の中で見ると、ソ連の国際環境の中で、アジア太平洋地域はきわめて重要だが、従来、中ソ関係も悪いし、日ソ関係も悪かった。ゴルバチョフとしてはここを何とか打開しなければならぬ。しかも、ブレジネフ時代——ブレジネフ、あるいはフルシチョフ時代からと言っていいでしょう——に残したアフガニスタンとか、モンゴルとかいったソ連にとって、ゴルバチョフが考えているような未来像の障害になるような国際環境ばかりじゃないかという認識がある

なかじま・みねお

1936年生まれ。東京大学大学院国際関係論修士課程修了。同博士課程を経て現在、東京外国語大学教授。アジア政経学会常務理事、日本国際政治学会理事。社会学博士。サントリー学芸賞受賞。中国の政治と国際関係を中心に論文、著書多数。



そうですね。
こうした認識を背景にして、自分の弱いところもさらけ出した上で経済改革をやらねばならないソ連の国際環境の中で、ブレジネフ時代のマイナス遺産が非常に問題になっているということをかなり率直、具体的にゴルバチョフは語っているわけです。したがって、従来のソ連の指導者の演説は、

やぎさわ・みつお

1925年生まれ。東京大学経済学部卒。朝日新聞記者（ロンドン、ジュネーブ、シドニー各特派員、調査研究室主任研究員など）を経て現在、中部大学教授。軍縮問題や米ソ関係を中心に論文多数。現在、本誌に「米ソ不戦体制100問100答」を連載中。



いちかわ・ゆういち

1935年生まれ。早稲田大学卒。党副書記長、同常任企画・中央執行委員、同政審副会長、同安全保障部会長。衆院当選5回。



大体言うことが決まっているし、ほとんど線を引くところはないんですけども、今回は非常にあちこちにアンダーラインを引いて、我々も十分考慮しなければいけない問題を提起している。そういう意味で従来と違う文脈だと私は見るわけです。
もう一つの点は、ソ連の最高指導者自身が、非常にリアリ

ズムの立場を重視していることですね。ゴルバチョフになつてから、彼は自分はリアリストの立場だということをしきりに強調しているわけですが、提案内容が非常に具体的で、しかもソ連の指導者が全世界に向かって、将来の自分たちの行動計画について、いろいろなことを約束するなどということとはほとんどあり得ないことだったと思います。今のソ連にとって非常に重要な中ソ関係とか、日ソ関係、アフガニスタン問題等々、あるいはモンゴルからの撤兵の問題などについてかなり明白に約束していることは、ゴルバチョフとしても本気でこの問題を、単なる宣伝で済まされない問題として彼自身が感じているのではないか。いわば我々にとっても大きな問題を提起されたのだと私は受けとめたわけです。

リアリティーに富む演説

八木澤三夫氏 私は『世界週報』の八月二十六日号に載つた国際情勢に関する部分しか読んでいないのですが、ゴルバチョフが演説した七月二十八日はソ連海軍記念日なんです。ウラジオストク市へのレーニン勳章授与記念式典で演説したというのは、そのとおりだろうけれども、私は、とくにレーガン政権になってから、アジア太平洋地域におけるアメリカ海軍の対ソ行動が非常に挑発的というか、オホーツク海、日本海はソ連の海じゃないんだぞ、それを思い知らせるとい

うか、わからせると言わんばかりの行動が目立ってふえてきている。それに対してゴルバチョフは、ソ連太平洋艦隊の激励に行ったなどいうことをまず感じましたね。

それと、読んでみまして、これは中嶋先生のおっしゃることに私は非常に教えられることの方が多いですけれども、私個人としては、終わりの方に出てくるウラジオストクを外国人に開放したいということに一番「オッ」と思いましたね。

ソ連首脳演説を全部読んではないので、比較しにくいけれども、それでもあえて言わせていただくと、派手にえさをばらまいたな、そのどれかに食いついてくれば、という感じがなきにしもあらずですね。大ざっぱなことを申し上げると、そんなところです。

市川 従来の政治宣伝でない、非常にリアリティーに富んだ演説であるとか中嶋先生のご指摘があつたんですけれども、どういう点かまず具体的に指摘していただきたいと思ひますか……。

中嶋 内政問題からすると、シベリア開発を中心としたソ連の経済の活性化という問題があります。その一端で、今おっしゃったように、ウラジオストクを開かれた港にしていこうという方向が出ていて、もしも本当にそのようになると、やはりアジア太平洋地域、極東地域全体にかなりの影響があると思うんですね。これは八木澤先生のご専門ですけれど



米・中・ソ関係をめぐり討議を交わす右から市川、中嶋、八木澤の各氏

も、普通は、極東艦隊の基地として外国に閉ざしておいて、それで北朝鮮の羅津だとか、ベトナムのカムラン湾と、結びつけて、ソ連の海軍が非常に増強しつつあるというイメージがあるわけでありますから、そこをとにかく開かれたものにして。現に最近、北海道の友好代表团なんかがウラジオへ行っ

て、写真を撮ってきたのが週刊誌に載っていましたけれども、もし本当にそういうことになるのであれば、ソ連のアプローチがかなり違ったものになると思います。

ご承知のように、ウラジオストクは、昔は、日露戦争以来、極東に関する窓口であったわけですし、日本人も随分住んでいて当時は「浦塩」と当て字したりしていました。そのようなイメージのあるところですし、私はナホトカからウラジオストクの方を見たことがあり、もちろんウラジオには入れなかったですが、これは中国にもすごく近い。中国と一番近いですね。北朝鮮にも近い。すぐ目と鼻の先。そして、まさに日本に非常に近いわけであります。このようなところをやっぱり開いていかなければ、ソ連はもう世界の大勢に立ちおくれるという認識が出てきたという問題がありますね。

国際関係の面では、ご承知のように、中ソ関係に言えば、中国との地上兵力相互削減の交渉の用意があるとか、モンゴルからの撤退の問題とか、いわゆる三大障害について、ほとんど全部触れているわけですね。アフガニスタンの場合は、六個連隊の撤兵というから、駐留ソ連軍の一割程度で大了ことないと言えはそれまでですけれども、それにしても、具体的に何個連隊ということまで触れていることはかなり大きな進展だと思います。

特にアフガニスタン問題は、今のソ連が、ちょうどベトナム戦争期のアメリカのように、アフガンの泥沼に足を引っ張

られて、どうしようもなくなっているという苦悩が読み取れるわけで、特にこれは、ブレジネフ時代のソ連がつくったマインナス遺産ですよ。ゴルバチョフとしてはこんなところに勢力を割きたくないという気持ちで非常に強く出ていて、アフガニスタン問題は最後にもう一遍取り上げて、一番長く言及しています。ですから、そんなことからすると、当面は六個連隊でも将来は全面撤退に近いかなりの展開がありはしないかと私は見えています。

これらの問題を確かにえさをまいたと言えればそれまでなんです、それにしてもかなり派手なえさをまいているわけですよ。だから、もし一年後、二年後に全然変化しなければ、ソ連はうそつきで、ゴルバチョフは従来のソ連の指導者と同じように、何もやっていないじゃないか、うそつきじゃないかということが歴然とするようなえさをまいているというのは、単なるえさじゃなくて、本気でやろうとしているのではないかと、僕は見るわけですね。

八木澤 これだけ派手にばらまいたということが、ソ連は本気だ、積極的にやると受け取るべきだと思っただけです。

ウラジオストクについて言いますと、ソ連は総領事館の開設を認める気じゃないだろうか。もしそういうことになる一番飛びつくのはアメリカでしよう。ただし、ソ連は「双務協定の国」ですから、あなたがウラジオストクに総領事館を開設したい、結構です。その代わり、私はあなたの国のここ

に開かせてください。すべての国に対してそれでいく。これは大変なえさですよ。

市川 そのウラジオストクをオーブンなものにしたいという点なのですが、これが意味するものはどういうことなのか。軍事的に見ますと、ソ連太平洋艦隊の重要な基地である。先日週刊誌に、水中翼船のような観光船と一緒に、ソ連の巡洋艦と一緒に、写真が出ていて話題を呼んでいましたけれども、そういう、いわゆる軍事的な基地としての役割を少なくて「平和志向のソ連」というイメージ宣伝に使うのか。

それとも軍事基地としての機能はそのまま、先ほど中嶋先生もおっしゃっていましたが、アジア太平洋地域への開かれた窓口としてウラジオストクを開くというのでしょうか。両方の意味があると思っただけでも、さっき八木澤先生がおっしゃったウラジオストクは、軍事的に見て、ソ連はどういう意図で言っているんでしょうか。

八木澤 例えばアメリカに総領事館の開設を認める場合でも、窓をあけて双眼鏡で軍事施設が見られるようなところには建てさせないですよ。

それともう一つ、偵察衛星の精度が、アメリカは物すごくいいんですね。あれは一九七九年、東京サミットが開かれたときに、ミンスクが黒海からはるばる回航されてきましたよね。とにかくウラジオストクに無事に到着した。

ところが、一年以上出てこなかったでしょう。海軍記念日にも出てこなかった。それはなぜかということが非常に関心のようになったんですね。理由を知っているのはソ連とアメリカじゃないか。アメリカは、偵察衛星でウラジオストク港内を写真に撮り続けて、ミンスクが出てこない理由を、つかんでいたと思うんだけど、ついに漏らしていないんですよ、僕の見落としでなければ。言い換えると、偵察衛星時代に軍港がどれだけ機密を保てるのかなという気がする。

ですから、ウラジオストクに総領事館の開設を認めることが、即軍事的にという市川さんの今おっしゃったことではないに、むしろこれはちょっと乱暴な言い方かもしれないけれども、ソ連は二正面作戦がやれるようになった。ヨーロッパでもデタント、アジア太平洋地域でもアメリカ、日本、韓国、オーストラリアなどの経済協力構想に乗りたいたいと。

市川 いわゆる極東第二戦線……。

八木澤 いや、軍事的な意味ではなしに、ソ連はアジア太平洋地域へも出ていきますよ、その拠点はウラジオです。だから、それを開放しますと取れないこともないんですよ。

市川 開放するという意味はどういうことですか。

八木澤 単にさしあたりは、総領事館の開設でしようけど。このウラジオは、北のムルマンスクに対比する極東の大拠点ですよ。これをソ連が外国人に見せたのは七四年十一月の七回目の米ソ首脳会談です。フォードとブレジネフ

の。このときにSALT IIに関する共同声明が発表されています。そのときに、フォード政権の政府要人だけに、随行記者団——アメリカ人だけですけれども、これまでウラジオストクに入れたのでアメリカはびっくりしたんですね。記者団まで入れたということ。つまり、ブレジネフは、米側とSALT II合意に関する共同声明を発表できるところまでこぎつけたことが、よほどうれしかったんでしょう。だから、ウラジオストクにアメリカ人を入れたんでしょう。

もう一つ、これは話が横道にそれるので恐縮ですけども、あれは七年前ですか、大韓航空機が初めてソ連領内にまざれ込んで行った先がムルマンスクです。一昨年、撃墜された大韓航空機の最後の飛行コースを延ばしていくとウラジオストク近いです。あれはうまくいけばウラジオストクに不時着するつもりだったんじゃないですか。だからソ連は撃墜したのかもしれない。それほど重要なところを外国人に開放する。そういう意味で、僕は今度のゴルバチョフ演説で一番「オッ」と思ったのがこのウラジオ開放なんです。

市川 ですから、私たちの常識から言いますと、ソ連の重要な軍事基地として、ペドロバブロフスクがあつて、ウラジオストクがある。そういう重要な、ある意味では秘密のベールに包んでおきたいウラジオストクをソ連が開放することの意味ですね。要するに、普通は見せたくない、秘密にしておきたい。それをオープンにしますよということは何を狙って

いるのか。その辺がよくわからないんですけども……。

八木澤 オープンにしますよと言いますが、例えば石川島播磨の乾ドックは、恐らくミンスクのような大型艦が、やがて太平洋艦隊に配属される。その修理なんかに備えて買ったんだと思いますが、ウラジオストク港内のどこに、乾ドックが据えつけられているかということも、先程お話ししたように、アメリカは偵察衛星で知っているでしょうね。ですから、これまで余りに秘密のベールに包まれていたがゆえに、我々が考えるほどウラジオストクというのは、もうソ連にとって、外国人の立ち入りを一切認めるわけにいかない、といったようなそれほどの秘密ではなくなったのかもしれないですよ。ソ連太平洋艦隊の隻数だって、刻々知っているでしょう。

市川 アメリカがですね。

八木澤 アメリカも日本の防衛庁も……じゃないですか。

軍事費の増大に悩むソ連

中嶋 その点で、僕は今度の演説を見まして、やはりソ連にとっての太平洋艦隊なり、いわば軍事力そのものの持つ意味に、今のゴルバチョフは、それだけではだめなんだという気持ちをもっている。むしろ軍事的な拡大のコストに悩んでいる、その悩みが歴然としているような気がするんですね。

というのは、日本の部分を見てみますと、とにかく日本人というのは、経済によって国と国との関係を活性化する方法をよく知っているらしい。これを自分たちも取り入れなければいけないということを非常に強調していますね。

ゴルバチョフ演説が出たときに、日本の中にも、大きく分けて二つの見方があったと思うんですね。私のような見方と、むしろ非常に警戒する見方ですね。警戒する見方は一方でこんなことを言っているながら、極東艦隊やウラジオ、カムラン湾の軍事基地を含むソ連の軍事力はまさに増強されているのであって、それをカムフラージュするために、このような演説をしているんだという見方がありましたけれども、どうも僕はそうとれないんですね。そういうフルシチョフ——ブレジネフ時代に見られた従来の軍事力によるところの世界戦略の拡大そのものに、かなり本格的な再検討を加えようとゴルバチョフは、考えているんじゃないか。

そこでウラジオの問題が出てくるわけですけれども、実は一九八一年でしたか、ナホトカでのパシフィック・セミナーという会議に私が出たことがあります。その会議では、環太平洋問題について、ソ連が主宰した会議なんです、ソ連がみずから、太平洋国家だと大いに主張していました。例のコンティキ号で世界を航海したスウェーデンの有名なヘイエルダール博士なんかをお客さんに呼んで、非常に盛大にやった会議だったんですけども、そのトーンは、要するにソ連は

これからまさにアジア太平洋に出ていかなきゃいけない。そこはアメリカや日本が制覇する海ではなくて、平和の海にしなければいけないという主張があったわけです。それでは日本の北方領土の軍事基地化やアフガン侵攻はどうなんだ、と私はソ連側と大論争しましたが、ただ、そこでびっくりしたことは、ナホトカとウラジオはすぐ近くなんです。しかもこのセミナーに出席したある日本の防衛関係者が、ウラジオストクへ会議の前に行っているんですね。私は、これは、ある意味では非常にコンフィデンシャル（秘密）なことかなと思っただけですけども、その本人も意外にとらわれずに僕らに話すんですが、防衛関係者が当時ウラジオにすでに入っているんですよ。かなり写真も撮ってきたんですね。

だから、そのとき以来、ひよっとすると、八木澤先生が今おっしゃったように、日本の防衛関係者にも、見せてもいいような状況に、ウラジオストクは実はなっているのであって、そのことは同時に、カムラン湾とか、北方領土の基地とか、北朝鮮の羅津についても、ひよっとすると同じことが言えるんじゃないかというのが、僕の当時から疑問なんですよ。

ですから、我々が見られないだけに、ソ連の極東戦略、特に極東軍事戦略、海洋軍事戦略に対する過大評価がありはしないかという気がしましてね。ソ連自身、そんなことをやってたって、そこで戦争をおっ始めることもできないことはわか

っているし、そのコストは高いことはわかっているんで、今度のゴルバチョフ演説についても僕のような解釈からすれば、ウラジオを、いわば開放港にして、それを拠点に日本や太平洋地域との経済関係を強化していこうじゃないかというニュアンスにとれるんですね。そうすると、ウラジオストクが持っている、従来我々が考えていたような軍事的な意味は、ちょっと薄れるんじゃないかという気がするんですね。

市川 ウラジオストクというものの、我々の印象で申し上げますと、ソ連の重要な極東の海軍基地、その印象を薄めて、むしろソ連が環太平洋というか、太平洋諸国との接点として、平和的な接点にしたいという意思表示という点も、今回の演説にあるということですね。

中嶋 僕はむしろそのように受け取った。だから、これが軍事力だけのひけらかしであれば、それなりの対応も簡単だけれども、ゴルバチョフのソ連はいろいろ変化球を投げながら、平和攻勢と言っているのか、あるいは平和外交と言っているのか、かなり積極的な外交姿勢を示しているんじゃないかという……。

市川 それは、例えば今、中国が近代化路線をとっておるわけですね。

八木澤 その前にこれを入れておいてください。私が読んだテキストにこういう箇所があります。

「ウラジオストクを外国人の訪問のために開放する問題も

やがて解決できるだろう。太平洋の情報の好転が実際に達成されれば、ウラジオストクは大きな国際的中心地の一つ、商業と文化の中心地、フェスティバルやスポーツ大会、会議や学術シンポジウムの都市になることができよう。我々は、ウラジオストクを東に向かって広く開かれた我々の窓にしたいと思っている」

ただ、細かなことでそこまで言う必要があるかなと思うんですけれども、総領事館の開設は認めても、船を入れないかもしれないんですよ。船はナホトカヘどうぞ。ただ、商業と文化の中心地、あるいはフェスティバルやスポーツ大会とか、学術シンポジウムの都市としてはウラジオストク……。

太平洋の活力利用を狙う

市川 今お話ししていた問題意識は、ウラジオストクをそうやって、東というか、太平洋地域に対するソ連の窓口として、ある意味では自由化、開いていこうというソ連の意図は、どういう背景から出てきているとごらんになっているんですかという点です。

例えばアメリカでも今、ニューヨーク、ワシントンよりも、むしろカリフォルニア、ロサンゼルスという太平洋岸に経済や人口の中心が動きつつある。日本、韓国、台湾、中国、シンガポール、マレーシア、いわゆる太平洋に、ある意味で

は経済的な活力が今生まれつつある。今後二十一世紀に向けてハイテクとか、そういう方向に行きつつあるわけですから、ソ連も太平洋に目を向けて、太平洋の持っている活力をソ連の経済の再建なり何なりに積極的に利用していきたい。そのためにはウラジオストクが窓口として一番いい。こういう積極的な意図とみていいんですか。

中嶋 そうだと思えますね。市川さんの要約は、まさにソ連の今考えていることを非常に要領よくおっしゃっていただいたと思う。

ただし、私は、そこで二つばかり問題が出てくると思うんです。一つは、そういう、いわば明るい未来をソ連は太平洋地域に感じていること、それはもう間違いない。このところソ連に行きますと、口を開けば、太平洋時代と言うんですよ。あるいは環太平洋だと。ソ連の科学アカデミーの中の研究所、例えば最近注目されている例のIMEMOと略称される世界経済・国際関係研究所の中にも、一年ぐらい前から、太平洋協力のための一つのセクションができましたし、アメリカ・カナダ研究所、極東研究所やハバロフスクの研究所などにもできて始めています。とにかく太平洋地域の重要性を非常に強調するわけですね。

ただ、それは、ちょっと太平洋時代に対する、バラ色の幻想がありすぎはしないかという気がするんですよ。私自身も、例の大平政権のときに、環太平洋連帯構想の研究会のメ

ンバーでしたし、現在も、それから発展したような形で太平洋協力日本委員会の一メンバーなんですが、実際に何か具体的に太平洋時代に何か進んでいるかというところ、まだ何も進んでいないんですよ。進めようといったって、そう簡単にいくものじゃない。

例えば同じ太平洋地域にもいろいろな地域がありますね。

ASEANの中にも、経済が悪いインドネシアやフィリピンのような状況のところもあれば、シンガポールのようなNIC諸国もある。確かにアメリカのウエストコーストが発展してきていることは間違いない。だけれども、実際問題として太平洋の経済を動かしているのは日本であり、台湾であり、韓国なんです。それにシンガポール、香港を入れてもいい。つまり、いわばソ連にとっては、建前からしても、そう簡単に接触できないような……。そういうところでありますから、具体的に、じゃ、何がどのようにできるかということに突っ込んでいくと、ソ連にとってはなかなかそう簡単ではない。

日本としても、具体的に、じゃ、何かやろうといったって、そう簡単じゃないわけで、結局やれていることは、五島昇さんなんかを中心とする太平洋経済協力会議、財界人が集まっているいろいろな何かやっていると、テレコミュニケーションの分野とか、さして問題のないような部分で、徐々に何となく太平洋協力が進んでいるのが実態であってね。

これが実態なんですけれども、ソ連はずうっと閉ざされていて、何か日本やアメリカやASEANやオーストラリア、ニュージーランドを含めて、太平洋地域で非常にうまくいっているんじゃないかという一種のコンプレックスというか、あこがれみたいなものがありはしないかというのが一つですね。

それに、同時に、ソ連の経済がどうしようもなくなっている。最近、特に石油価格の国際的な低落傾向もひどいし、ソ連自身が石油不足だと思います。私が自分の目と足で調べてきたところによると、一昨年後半から、ガソリンの値段でさえも、ソ連国内で消費するのに四倍値上がっていますから、今は一リッター四十八カペイカぐらいですから、日本よりもむしろソ連の方が高いんですよ、産油国ではないが。しかも、社会主義国ではないが。

市川 日本円で幾らぐらいですか。

中嶋 日本円で、当時私が計算してみますと、やっぱり百四十円前後なんです。そうすると、今は日本の方が安くなってきている。そこまで経済がガタガタしてきていて、そして科学技術も立ちおけているということでしょう。

後でお話が出ると思いますが、一方、SDIという問題がアメリカから提起されている。そうなってきましたと、ソ連としては、シベリアを中心として、南の海——北方領土と我々は言うけれども、ソ連にとっては南方領土なんです。何と

かソ連にとつての南方領土まで地域圏に含めた新しい構想を考えなければ、どうしようもないんじゃないかという実情が、実は今度のゴルバチョフ演説をもたらしたという、ちょっと皮肉な見方もできるんです。

市川 中嶋先生は中国問題のご専門で、中国を軸にソ連とか、アメリカ、アジア地域をずうっとごらんになっていらっしゃるわけです。八木澤先生は、米ソ関係を軸とした国際関係のご専門で、アメリカからソ連をごらんになったり、ソ連からアメリカを見るといってお立場であるわけですが、ゴルバチョフ演説に見る中ソ関係は後でもう一度詳しく伺いたいと思います。

ウラジオストクの演説が持つ米ソ関係に対する影響というか、その視点から見ると、どんなことが言えますか。特に何か特筆すべきことがありますか。昨年、米ソ首脳会談がジュネーブで行われて、ことしも期待されているという雰囲気もある。こういう中で、その辺はどうごらんになっていますか。

八木澤 直接のお答えにならないかもしれませんが、米ソ関係を知るためには、中ソ関係と米中関係を知る必要があります。このゴルバチョフ演説を読んで感じるのには、アジア太平洋地域においてアメリカの影響力を消したいというのは、ソ連の長期的な政策の眼目だろうと思うんですけれども、それができないということは、ソ連も知っているはずですね。

もう一つ、日本をアメリカから引き離すことはとてもできない。特に七月六日の衆参同日選挙の結果。ただ、中国だけは何とかアメリカからできるだけ離しておきたいという狙いが、このゴルバチョフ演説ににじみ出ているような気がします。

にじみ出る中ソ改善の指向

中嶋 僕もそうだと思うんですけれども、従来、ブレジネフ・グロムイコ外交というのは、どちらかというと、非常に二極指向ですよ。米ソだけで世界が決まっていくという対応をとってきたと思うんです。それは、ある意味ではレーガン政権もそうであって、これはアメリカ人もソ連人も体質的に、世界は自分たちだけというような感じがあって、お互いにけんかもして、対立もしていながら、やはり世界の二大超大国というところで、いい気分になっていたところがあると思うんですね。

ところが、それだけではソ連にとつて不利であるということがだんだんわかってきた。ましてアメリカはSDIに行くところ。そこで出てきたのがやつぱりゴルバチョフの新しい外交だと思うんですね。私はそういう点では、ゴルバチョフは、どちらかというと、二極をベースにしながら、多極的な指向を持ち始めてきていると見るわけです。やはりヨーロッパ

ッパとか、アジア太平洋地域がもう一方で重要だという多極認識がある。だけれども、最近のヨーロッパは、ソ連にとっ
ては在来舞台であつたし、どうも余りぱつとしない。何と
いっても日本を中心としたアジア太平洋地域が重要だとい
うので、そちらの方向へ急速に力点が加わっているような気が
します。

もう一つは、党中央宣伝部長になった科学アカデミーの世
界経済・国際関係研究所前所長であつたヤコブレフさんの影
響が非常にあるとよく言われるわけですが、私は彼の著
書をよく読んでみたくて、彼の著者は難しいタイトルに
なっています、『危機の瀬戸際に立つて』という著書なん
ですね。そして、「トルーマンからレーガンまで」という副
題がついているんですが、これを見ると、米ソだけで世界を
競い合っているんだといっているんです。やはりそ
こはヨーロッパ、特に日本を重視した学者であつて、彼が今、
ドブルイニン前駐米大使とともに、クレムリンの書記局の中
で、ゴルバチョフの外交ブレンになっているんですね。

このゴルバチョフ政治の一つの大きな特色は、ソ連がブレ
ントラストをつくり始めたということなんです。経済の面
ではアカンベギヤンのような経済学者を登用する。外交では
ヤコブレフのような者を登用する。私は去年もモスクワに行
って、たまたま科学アカデミーの招待で講演に行きました
ら、世界経済・国際関係研究所とか、極東研究所、東洋学研

究所などの私のよく知っている人たちと議論しましたが、そ
れらの人たちが急激に活気づいてきている。ちょうどアメリ
カもそうでしょう。この間まで、何でもないお互いの知り合
いの学者だと思ったら、急にホワイトハウスに入ったりす
る、ジョージ・ワシントン大学のシーグルさんなんかもそう
ですよ。彼は今、レーガン政権のアジア問題担当補佐で
す。

同じようなことがソ連にも出てきているんですね。そし
て、ヤコブレフなんかの話を聞いたり、彼の著作を分析して
みますと、非常にそういう意味では、どちらかというと、日
本を重視した多極外交という点が見えています。したがつ
て、そこにゴルバチョフの新しいスタイルがあるし、同時に
それは、もちろん基本的にはやっぱり米ソ関係が主軸である
ことは変わらないわけです。だけれども、それだけで追っか
けていると、ソ連にとって不利だという一種の劣勢認識が逆
に新しいソ連の戦略をもたらした。そこで、問題はやはり日
本と中国だと思ふんですね。

日本についてはいろいろな見方がありますが、私は、アジ
ア太平洋地域を重視する限り、ソ連にとって日本は非常に重
要で、日本は、とにかくソ連にとってまぶしい存在なんです
ね。日本では、ソ連に対する感情はよくないけれども、ソ連
の国民感情の中では、実は日本は非常にいい。ソ連の一般市
民は、本当に日本というと、何か夢の国か宝の島みたいに思

っているんです。

そういう背景の中でゴルバチョフの新しいアプローチがある。それには、日本との関係も重要だけれども、まず第一に、中国との問題を修復しなきゃいけない。演説の分量からすると、中国は日本より多いんですね。それはゴルバチョフにとって、かつての中ソ対立は、ソ連にとって足を引っ張るだけだ。アジア太平洋地域に出ていこうと思っただけで、何か言うとか、すぐソ連の覇権主義だとか今までは言われていて、行動の自由がなかったわけですけども、そこで中ソ関係を大幅に改善しようとしている。これは、中国自身が非毛沢東化を始めて、内側から変わってきたという面が一つありますし、内側から変わってくるプロセスの中で、中国自身が経済改革を進めてきている。この経済改革は、ソ連にとってもこれからまさにやらなければならないものであって、そういうところからすると、この点でも、ソ連側からして何ら抵触するところはないんですね。むしろ西側との経済協力を加味しながら、経済を活性化しようというのは、ゴルバチョフも考えていることですからね。そういうようなところから、積極的に中ソ改善の呼びかけをしているという色彩が非常に強いと思います。

それで、従来残っていた中国の三条件についてきちんと触れているんですね。ですから、中国が中ソ改善のための三大障害と言ってきたことを十分意識して語っているということと

ろがあります。中国をすぐ持ち上げているんですよ。「鄧小平さん、ありがとう」と言わんばかりなんですね。

そこで出て来たのが、何といっても世界の重要な問題は、二つの社会主義大国の肩にかかっているんだという今回のゴルバチョフ発言ですね。この点については、中国とソ連の間に何ら不一致はないじゃないかということを言っている。そして、「なぜ我々が、この共同の利益について、対立する必要があるのか。これからはお互いに協力し合っていこう」という。それからアムール川の問題も取り上げたり、中ソ国境の問題を取り上げたり、また私が従来から言っていることですけれども、中ソ間の最短距離の鉄道建設ですね。これは新疆ウイグル自治区からカザフ共和国のアルマータに行く鉄道を指しているのですけれども、その問題なんかに触れて、「国境横断的なプロジェクトをどんどん進めていこうじゃないか」と言っている。このニュアンスの背後には、将来のシベリア開発のために、中国の労働力まで導入しようと言わんばかりのニュアンスで呼びかけているわけです。ですから、こうなってくると、中国側としても受け答えせざるを得ないと思うんですね。中国が言った中ソ間の障害について、全部触れているわけです。

そこで、中国側の方を見るんですが、どうも中国は、鄧小平体制下に今ありながら、二つの潮流がはっきりしています。一つは、経済開放体制を現状のまま担っていこうという

鄧小平、胡耀邦、あるいは胡啓立に代表される潮流、いわば改革派と言われる潮流、この経済改革がうまくいっていいんだけれども、最近の中国の経済改革は、私から見ると、あちこちで蹉跌が起きているんですね。

一つは、行き過ぎ、急ぎ過ぎの余り、あちこちに腐敗が起こったり、拝金主義、お金でなければどうしようもないという風潮が起こったり、まず第一に、急速に对外开放をやり過ぎたために、今、中国は外貨不足で三十億米ドルぐらいしかないわけですから、十億余の人口を持ちながら、これでは深刻です。だから、日本との契約でもどんどんキャンセルしてきているわけです。商談のトラブルは非常に多いし、日中貿易をやればやるほど中国は赤字になるわけです。

そうなってみると、鄧小平自身が軌道修正をして、今は引き締めに向かっているし、同時に、鄧小平の、いわゆる経済改革に対する批判の潮流が出ているわけです。それが陳雲であり、李鵬であり、姚依林であり、あるいは万里とか喬石とか、そういう人を加えてもいいと思いますけれども、それらの人たちがもう一つの潮流としてあるんですね。

ですから、この二つの潮流が今は派手にけんかはしていないにせよ、鄧小平としても自分の改革に対する批判があるということを意識せざるを得ない。このような批判は、例えば去年の九月十八日に始まった中国共産党全国代表会議の最終日に、鄧小平と陳雲が演説をして、あからさまに陳雲が鄧小

平の政策を批判しているわけですから、この批判を彼も受け入れざるを得ない。

つまり、軌道修正しているわけですね。こうなればなるほど、中ソ関係からすると、ますますいいパフォーマンスなんです。余り西側だけに行かずに少し戻ってくるし、モスクワから見ると、まず前面に立ってきているのが陳雲であり、姚依林であり、李鵬ですから、ソ連から第一副首相が来たときなんか——今はタルイジン筆頭副首相が来ているんですけど、アルヒポフというもう一人の第一副首相が一昨年に来たときも、全部彼らが接遇し応接をして、経済協力協定や技術協力協定や長期貿易取引も結んでいるわけです。タルイジンが来ているときも、みんな彼らが接遇している。そういうところですから、中国の政治は依然として二重構造になっ­ていまして、そうしますと、その両方のラインの存在という問題をとってみても、中ソ関係はかなり内在的に動いていくだろうと思います。

だから、一方、竹入さんが行ったり、中曽根さんが行っても、安倍さんが行ってもそうなんですけれども、日本や西側の政治家が行くと、会うのはこちらの鄧小平側の人たちだけであって、陳雲なんか絶対に会わないんですね。それで、彼らにとっては、三大障害が一つの中国の外交的な説明の非常にいい条件なのであって、この点を説明をするんですね。「いろいろ三大障害がある限り中ソ関係はうまくいきません

から安心してください」と言うわけです。そういうことをずうっと言い続けてきていると思うんですね。

だけれども、初めのうちは、「三大障害がある限り、中ソ関係は改善されません」と言っていた。そのうち、「三大障害の一つでも満たされれば改善される」と言い、今度は、陳雲なんかは何と言っているかというと、「三大障害があっても、中ソ関係は改善できます」ということを言っているわけで、ずうっとこの二、三年、ニュアンスが変わってきています。言ってみれば、三大障害は、中国が西側に対して外交的に用いているプレゼントなのであって、三大障害という条件が出てきたときに、中国全体としては、中ソ関係は毛沢東時代とは変えなさいけないという合意があったと思うんです。その合意をどこまで進めるかについて、中国内部に若干ニュアンスの差があるということ、そこでゴルバチョフが今回のような演説をした。

実はこの辺の中国内部のことは、ソ連も十分読んでいると思うんですね。カピッツァという外務次官自身が、私もよく知っていますけれども、もともとモスクワ大学で教えていた中国専門家ですし、新しい外務次官で中ソ問題専門のロガチョフとかそういう布陣が最近のクレムリンには配されていますから、中国の内部事情を読んだ上で、こういう演説をゴルバチョフはしているんだと私は見るわけです。

市川 八木澤先生、先ほどウラジオストクのゴルバチョフ

演説は、アジアにおけるアメリカの影響をできるだけなくしたい。日本は無理だが、少なくとも中国だけはどういう思いがあふれているとおっしゃったわけですが。

核時代の基調はデタント

八木澤 ソ連のアジア外交の根底には、アメリカの影響力をアジア太平洋地域から消したいという願望があるだろうけれども、しかし、それは到底無理だということをソ連も知っているはずだということであって、ウラジオストク演説の中に、そういうことが書かれているということじゃありません。

ウラジオストク演説では、むしろ逆のことを言っていますよ。「米国の参加なくして、すべての者にとって満足のいくような形で、太平洋地域の安全と協力の問題を解決することは不可能だ」と。

市川 七、八年前から、中国の経済の専門家が、日本の高度成長がなぜ可能だったのかということを研究していたことがあるんですね。日本で都留重人先生がそれを書いていらつしやるわけですけれども、一つは政局の安定。そして、軽武装経済主義。もちろん一ドル三百六十円という輸出に有利な為替レートの決定。そういう問題があるんですねけれども、かなり中国は意識して、なぜ日本の経済の高度成長が可能で

あったのかということを相当調べていた時期があったと思うんですね。

今お話を伺っております、結局、近代化路線、経済改革路線は、政局の安定と近隣諸国との友好関係というんですか、安定というんですか、中ソ対立という中では、ちよつと近代化路線はもたないと思うんですね。日本が軽武装、経済主義というのか、平和路線できて経済の高度成長があった。そういう点で見ますと、本当に中国は近代化を進めていくためには、政局の安定が必要であるし、同時に、ソ連との関係を安定させないことには、これはできないんじゃないのか。そういう意味からも、中ソは、党と党のイデオロギー的なレベルでの改善は、いろいろ党のメンツという問題があつて難しいかもしれないけれども、国家と国家の関係は相当改善されるんじゃないのか。こういう見方が一方にあるわけですが、中ソがかなり改善されていった場合——それような雰囲気なんですけれども、米ソ関係にどんな影響が出てきますか。

八木澤 中ソ関係が改善された場合ですか。

市川 そういう意味では、中国カードというんですか、米ソの間にはまだ生きているわけですか。

八木澤 米中ソはお互いに使い合っているんじゃないですか。中国もソ連カードを使う。ソ連も中国カードを使う。現にゴルバチョフの演説なんかは、中国カードを使っていますよね。アメリカも、ソ連に対しては中国カードを使い、中国

に対してはソ連カードを使っているでしょうし、その中で一番切り札をたくさん持っている国はどこだ。アメリカなんですね。ということじゃないですか。

市川 切り札が一番多いという意味は、両方使えるという意味ですか。

八木澤 いろんな手の込んだことを一番たくさんやれるのがアメリカだと私は思っています。

市川 米中はいいですよね。中ソ以上にね。

八木澤 先ほど市川さんのご質問に正面からお答えしました、こういうことをお話ししておいた方がいいかと思ひます。私が米ソ中関係に関心を持つようになったのは、ジュネーブ時代に軍縮委員会を担当して、アメリカとソ連の舞台裏のやりとりを見ることができてからです。軍縮問題の本質は安全保障であり、経済と安全保障にその国の本当の姿があらわれる。その安全保障の問題を通して米ソ関係を見ていった場合に、それは当然米ソ国家間すべてにわたらざるを得ないし、また米中、中ソ関係にもわたらざるを得ないんですけれども、こういうことが見えると思うんですね。

これは私の持論であり、『公明』に連載させていた、いっているんですが、米ソ間には事実上の不戦条約が存在する。核兵器不拡散条約ですね。また、米中間には武力不行使を含む平和五原則の尊重をうたった上海宣言が存在する。核兵器不拡散条約の発効は七〇年三月で、上海宣言は七二年二月で

す。ということは、中ソ対立の中であって、米ソの間では核兵器不拡散条約があり、米中の間では上海宣言によって、それぞれデタントが成立した。その場合のデタントとは武力不行使の約束なんです、それが七〇年代初期の時点で既に成立していたということです。

じゃ、そういう米ソ中三国関係を規定する大ワクがその後変わっているか。私は、基本的には何も変わっていないと思います。核時代が続く限り、変わりえない。その頭で私は、ゴルバチョフの演説も読むわけです。

今のご質問ですけれども……。

市川 それをそのままずうっとしゃべっていただきたいんですけれども……。ゴルバチョフ演説をごらんになったとき、どのように思われたのか……。

八木澤 もう一つ付け加えますと、西ドイツのワイツゼツカーという核物理学者が冷戦の末期でしたか、「米ソの世界って何だ」という問いを投げたんですね。そして、米ソの世界とは、核兵器を持った二つの超大国が、地球的規模でのチェス——西洋将棋を指しているようなものだ。ところが、そのそばで中国が将棋盤をひっくり返しそうですね、危なくて仕方がないんだという非常におもしろい譬え方をしたことがあります。

ところが、今お話ししたように、米ソの間では核兵器不拡散条約があり、米中の間は上海宣言によって、武力で将棋盤

をひっくり返さない了解が成立した。では、米ソ中三国内ではすべてがめでたし、めでたしで進むかというと、全くそういうことではない。要するに米ソ中三国は、武力不行使を約束しあうことによって、核時代における身の安全を図った。その上でいわば安心してパワー・ポリティクス（権力政治）を展開し、自国の利益も追求する。ただ、その場合、武力が使えないだけに余計手の込んだことが行われるし、非常に複雑な様相で事態が進行するということは今日までの現象、事象が如実に証明していると思いますね。

もう一つ、ゴルバチョフ政権ができて、グロムイコが外相から外されたというが、外されたという言い方は当たっていないんじゃないか。

グロムイコはミスターニエツト、あるいはミスタービートルですか、拒否権ばかり行使した。そういう人物をゴルバチョフ政権になって引き続き外相にとどまらせることは、ゴルバチョフの考えているソ連外交に適切じゃないんだ。それで祭り上げたという見方は違うんじゃないか。グロムイコが外相をしていたときには、拒否権を使わざるを得ない状況がソ連外交に続いていたと思うんですよ。

これは国連のことを調べてみればすぐわかるんですけれども、第二次大戦が終わって、国連が創設された。そこでどういう状況が起きたかというと、西側が表決に訴えた場合、数の上では圧倒的に劣勢なソ連は必ず負ける。そこで拒否権が

認められている安保理事会では拒否権を行使して、その決議案を葬り、拒否権が認められていない原子力委員会や軍縮委員会では、ソ連の代表は退場したんですね。退場することによってその会議をご破算にする。そういう、つまりソ連が追い詰められていた時期に、グロムイコは外相であつたわけですよ。

またブレジネフ、グロムイコのコンビを組んでいた時代は、アメリカとの間でいかにして核時代の安全を保つか。そして核に関する軍備管理、あるいは軍縮をいかにしてまとめるかということが最大のテーマであつた時代です。

つまりグロムイコは戦後四〇年にわたってアメリカ外交の手の内を知りつくしている貴重な存在。しかも政治的野心を持たない。その彼がもう高齢で外相の激務にたえられないから、最高幹部会議長の地位を提供して、その功に酬いたというんじゃないか。だから、彼は健康が許す限り、ゴルバチョフの相談相手になるんじゃないでしょうか、外交面の。

それともう一つ申し上げておきたいのは、ブレジネフが、書記長時代にアメリカの「タイム」の編集部とのインタビューで、「抑圧された民族の解放闘争を支援することは、社会主義国の崇高な使命だ」と言っているんですよ。これは、恐らくアメリカとの平和共存に重点を置いたことに對する中国の痛烈な批判が、クレムリンの頭にあつたんじゃないかと私は想像するんですが、ブレジネフとグロムイコの時代

にソ連が武力に重点を置いたことを、單にソ連の対外進出とるのはどうでしょうかね。たとえば一九七九年末におきたあのアフガニスタン事件——あの国は一九五〇年代から東西対決の舞台になつていたし、七〇年代に入つてからは革命と反革命の激しい戦いが続いていた。戦後に限っても三〇年近い経過があります。

しかし、とにかくアフガニスタン事件は非常に大きかつた。これはまた後で触れられるときがあると思うんですけども、そういう経過は無視できないような気がします。

中嶋 僕も、米ソ関係は基本的にやはりデタントの基調の中にあると思いますね。というのは、私が従来から申し上げているように、ソ連はみずからの軍拡のコストに悩んでいる。対外的に派遣している軍事顧問団とか、ソ連の自前の領土以外のところに出している軍隊の維持費だけで、年間百から百数十億米ドルも必要となつていて、今、ソ連にとつて非常にコストが大きいわけですね。しかも、それだけのコストをかけても、必ずしもソ連の世界戦略は成功していると言えないわけですね。こういうことに對する根本的な反省というか、自己批判というか、再検討をし始めているのがゴルバチョフのソ連である。それは同時に、先ほど来申し上げているように、ソ連経済に對して、根本的な再検討をしようとしているのがゴルバチョフ。そのように見る限り、ソ連の側から、いわばデタントを崩す条件はないと思います。

アメリカの側を見ていますと、アメリカも、レーガン政権はいろいろ強気なことを言っておりますが、やはり経済が悪くて軍拡のコストに悩んでいることは間違いないわけですから、そのことが昨年のジュネーブ会談をもたらしした基本的な要因だとすると、米ソ関係はその枠の中で維持されていくことは間違いない。ただ、それがSDI戦略のような方向に移行するかどうかはまさにこれからの問題で、それに対してソ連は必死に阻止しようとするでしょうね。それは、SDIに対するソ連側の批判のみならず、そのような時代に西側が移行していった場合に、とても太刀打ちできないという意識がありますから、徹底的にそれは批判し、抑制しようとする。

そのためにもソ連にとって有利な外交関係をつくらうというので、今回の演説があつたと思うわけです。

そうしますと、それが米ソ関係にどういう影響を与えるか。あるいはさらに米中関係というもう一つの重要な国際関係にどういう影響を与えるかということなんですが、私はそこで若干アメリカの今のワシントンに対する危惧がありまして、最近のワシントンは、どうも中国について余りきちんと分析していないんじゃないかという気がするんですね。ということは、米中関係は、全般的にまだフレッシュな関係ですし、どっちかというところ、幻想の中でいろいろやっていて、割合にバラ色に推移してきているわけです。そして、中国は中国なりにアメリカに対する、いわばリップサービスはします

から、その点でアメリカは、今の中ソ関係なり中国内政のかなり突っ込んだところまで見ていないで、依然として米中関係を機軸に考えれば、中ソ改善はあり得ないだろう、あるいはアメリカが経済援助したり技術援助をすれば、中国は中ソ和解などしないだろうと見ていると思います。あるいは少なくともこれまで見てきたと思います。つまりチャイナカード政策、言ってみれば中ソ離間策ですね。中ソは離間できるという、戦後アメリカの冷戦体制以来始まっている、ずうっと一貫した政策の基調の上にあると思いますね。

ところが、恐らく今回のウラジオストク演説は、アメリカにとっても大変な衝撃であつただろうと思いますが、そこへ持ってきて、中国がこれを受け入れていくことになる、いわばアメリカのチャイナカード政策が崩れていくわけですね。中ソ離間策が崩れていきますから、そのときに、アメリカはひよっとすると、ある種の中ソ和解の衝撃、脅威感にとらわれやしないかという気がしますね。

我々日本としては、むしろ中ソ関係改善というのは、対立していたことが異常であつて、ある程度ノーマルにいくことが当然だと受け流せば、そんなに脅威に感じないと思うんですね。でも、アメリカはその点、果たしてそれだけの準備があるかどうか。これまでは余りにも中ソ対立という神話にかけた外交をし過ぎていたような気がしますね。

公明

'86 NO.298
November
11

THE KOMEI

〈特集〉 **米・中・ソ関係の底流を読む**
〈シリーズ特集〉 **「地域政策」を求めて——老人福祉**

てい
談

モスクワからのシグナル

中嶋嶺雄 VS 八木澤三夫 VS 市川雄一

〈SDI〉萎んだレーガンの夢 竹岡 勝美

対
談

老人福祉はいかにあるべきか

小山 寿／大橋敏雄

絵で見る 公明党がめざす21世紀の老人福祉

ウサギ小屋・ニッポンからの脱却

早川 和男

核を
考える

チェルノブイリ五分前・日本の原発

藤田 祐幸

枕元まで来た核の発射台

梅林 宏道

そこが聞きたい——国鉄問題と公明党

南北問題こそ平和戦略の鍵

矢野 暢

公明党政治理論誌